NORMALIZATION FOR NEXT SOCIETY

地域精神医療誌・フレンドシップ
企画編集:NOVA出版

いぶき

フレンドシップインタビュー

共同作業所からみえる障害者の未来

藤井 克徳

VOL.43 2016

童謡『かわいいかくれんぼ』

共同作業所からみえる障害者の未来

藤井 克徳

精神障害者のための日本初の共同作業所

わたしと共同作業所のかかわりは、東京都小平市にある都立小平養護学校という肢体不自由児の養護学校で教諭をしていた1970年代前半の頃にまでさかのぼります。

当時は、養護学校で学び高等部を卒業しても、適切な社会資源がなく、どこにも行き場がありませんでした。生徒たちや両親から卒業後の相談を受けても、応ずることができないまま、わたしたち教師にとっては心の痛む日々がつづいていました。

若かったわたしたちは、自分たちの手で卒業生が社会で働ける場所をつくりたいと、地域の人びとに呼びかけ、1974年6月、アパートの四畳半一間を借りて、「あさやけ作業所」を開所しました。障害の種別を越えての作業所は、当時としてはめずらしいものでした。

あさやけ作業所には、身体障害者や知的障害者に加えて、小平市に国立武蔵療養所（現在の国立精神・神経医療研究センター）があったことから、精神面に障害のある人から「働きたい」という声が聞こえてきました。とはいえ、精神障害者のみなさんと他の障害のある人とでは作業能力面などでかなりの違いがあり、結果的には、「あさやけ作業所」とは別に、1976年10月に精神障害者を対象とした「あさやけ第二作業所」を開所しました。これが、日本で初の精神障害者のための共同作業所となりました。

その翌年の1977年には、全国の16ヵ所の共同作業所によって「共同作業所全国連絡会（現、きょうされん）」が結成され、現在は就労継続支援事業B型やグループホームを中心に、約1,900ヵ所の会員を擁するまでに至っています。

その人らしい自立をめざして

日本には、働けるか、働けないか、という生産性だけで、その人の価値を判断する風潮があります。このことによって、障害のある人が肩身のせまい思いをさせられ、社会参加や自立の道をせばめられてきたようにも

感じています。障害のある人は「特別な人」ではありません。最新のWHOのリポートによると、障害のある人の割合を全人口の15%としています。誰もが障害を有する可能性があります。

わたしたちは、障害を特別なものにしないために、共同作業所を家族や障害当事者、スタッフだけの取り組みとせず、「地域住民との共同の事業にしましょう」という言葉を掲げ、広報活動に力を入れ、大規模バザーを開き、ボランティアの参加を得るとともに、啓発セミナーなども行いました。その結果、「あさやけ作業所」の利用者である精神障害者を含む障害のある人に対して、市民の見る目や姿勢が変わっていき、利用者の社会(地域)参加や自立生活の道を押し広げていきました。

こうした活動は、「障害のある人に何が必要か」という素朴なテーマを関係者に突きつけることになり、労働分野や福祉分野に加えて、福祉行政や保険行政も、腰の重かった医療機関、ボランティアグループやマスコミまでかかわってくれるようになりました。

共同作業所に端を発した取り組みは、グループホームなどの住まいづくりにもつながり、相談事業や一般就労支援事業の拡充、当事者グループの活性化などへと広がり、活動に重層的な厚みが加わるようになりました。わたしは、こうした活動の全体を「トータルリハビリテーション」と呼称しています。

もうひとつの重要なポイントは障害者施策の充実です。たとえば、これまでの精神障害者の施策の柱は、医療中心主義だったといわざるをえません。超高齢時代を迎えた現在、認知症を含む高齢者問題への医療と福祉の課題は、障害のある人を地域で支えてきた実践のなかに豊富なヒントが内包されていると思います。40年近い共同作業所の営みは、こうした連携実践に新たな地平を拓いていくと思います。

真のバリアフリー社会に向けて

わたし自身、視力に障害があり、「障害」や「バリアフリー」については普段からいろいろと感じています。たとえば、駅や公共施設のバリアフリー化は、都市部を中心に改善が進みました。一方で、障害のある人に対する意識、「心のバリアフリー」については、残念ながら本質はほとんど変わっていないのではないでしょうか。わたし自身もそうですが、障害のある人は、いろいろなかたちでの偏見や差別的な扱い、善意との境がみえにくい同情的な扱いを感じることがあるように思います。

2014年1月20日、障害分野にとって画期的な出来事がありました。日本が、国連の「障害者権利条約」(2006年12月13日採択)を批准することになったのです。50ヵ条のどこをみてもキラキラ輝いてみえます。なかでも「障害」のとらえ方について、これまでは、身体面や精神面の障害という本人に属する機能障害のみに焦点があてられていましたが、条約では、機能障害は大事としながらも、機能障害を有する本人を取り巻く環境(社会的障壁)についても重視すべきだとしています。それは「障害」は、おかれている環境によって重くもなれば軽くもなるとしたものです。条約の全体を貫く考え方として、「インクルーシブ」ということです。それは、「わけ隔てない」ことであり、バリアフリーをさらに発展させた概念です。「差別の反対は無関心」、これはわたしの持論です。

わたしは今後とも共同作業所やきょうされんの活動を通して、障害者権利条約に関心をもっていただき、障害を正しく理解することで、障害のある人の真の姿を知ってもらうことに尽力していきたいと思います。

藤井 克徳
(ふじい かつのり)

1949年 福井県生まれ。
1970年 青森県立盲学校高等部専攻科卒業
1970年 都立小平養護学校(肢体不自由、現在の都立小平特別支援学校)教諭(～1982年)
1982年 あさやけ第2作業所施設長(～1994年)
1994年 社会福祉法人きょうされん第2リサイクル洗びんセンター施設長(～2005年)
1981年 共同作業所全国連絡会(現在のきょうされん)事務局長を経て1994年常務理事、2014年専務理事
1994年 埼玉大学教育学部非常勤講師(～2003年)
2012年 内閣府・障害者政策委員会委員長代理(～2014年)
2012年 国連ESCAPチャンピオン賞(障害者の権利擁護推進者)受賞

【現職】日本障害フォーラム幹事会議長、NPO法人 日本障害者協議会代表、公益財団法人日本精神衛生会理事、日本精神保健政策学会副理事長、きょうされん専務理事など。近著に「えほん障害者権利条約」(2015年、汐文社刊)。

特別寄稿 下

初心不忘－病院開設の理念

医療法人 松和会　門司松ヶ江病院 名誉院長
門司メンタルクリニック 院長　山浦 賢治

治療の理念

精神障害という理解されにくい病気で悩んでいる人達との心の触れ合いを通じて、その純粋な心、ひたむきな努力を受けとめ、「自由と尊厳と生産性の回復」に、全職員挙げて精一杯の援助をし、病院の門を社会に大きく開いて奉仕いたします。

希望を目標に

精神科医としての大学専修は、精神病理（西園講師）を選び、精神分析（自由連想）、催眠療法（前田講師）に人気があったものの、わたしは森田療法に関心があり、強迫観念の発症と治療を考え、出張病院（若久病院）の神経症病棟で過ごしました。

昭和35年5月には妻子を迎えに行き、再び義父と飲み交わすなか、義父から新しい精神医療で開業の意志を問われ酔いが覚めたことを思い出します。

わたしが、出張病院の経営規模と基盤しか知らないままの開業に対する不安のなかで、「将来は開放病院をつくりたいと思いますが……」と語尾がかすれそうになりながらも話したとき、義父から「独立起業の体験から40より30代が良い。立地や法律を早めに検討するように」との信念と推奨の言葉を受け、感動と謝念の渦巻くなかで、希望と具体的目標（新様式の精神科病院の創立）への一歩踏み出すことにしました。

精神科病院の立地としては、2年間生活をした縁から北九州地区とし、さらに15万都市でありながら精神科病院として日明病院、八幡保養院、小倉蒲生病院の3院のみという更地感が感じられたことから門司市にすることに決めました。

地鎮祭

目標を計画、実行に義父と地域の支援

義父は門司市の立地希望に、毎月2回の売地選定を見、探すため、日田からジープで門司駅にこ

られ、わたしと合流し、市内巡視するなかで、候補地を代替地斡旋がなされていた松ヶ江海岸（新門司工業団地計画中）の「御堂バス停前で日合神社、西迎寺、山門には玉泉寺の鎮座と花のトンネルの景勝」とすることとしました。

精神科病院という特殊病院開院には、結核療養所（松寿園）と同様の地域住民の同意書を要したことから、30歳で公民館での啓発的説明会、病院見学会、さらに夜間救急医療の応需、職員雇用の契約、農地転用許可、稲の収穫と水利同意の後の棚田を病院用地に整地、建物建築許可（院内自宅）開放管理型として、塀フェンスいっさいなし、入院患者予定ゼロという状況で、昭和36年4月10日、松ヶ江北公民館ホールで開院祝賀会式典を挙行することになりました。

お花見

実行と実績と反省

精神病に理解の乏しい社会とはいえ、成果があるという正当なことでも、新方式の医療としての業績を上げることには、覚悟と努力が必要でした。開院挨拶で表敬した当時の福井医師会長は、門司市は精神病患者と家族のニーズはあるが軌道に乗るまで3年間在宅の応需を努力せよとの餞の助言をいただきました。

実践する開放管理療法の治療効果は、治療に自主参加の意欲が必要なため、開院年の秋季運動会に向けて「歩いて脳を鍛えましょう」とのスローガンを掲げ、今津浜の海砂をリヤカーで毎日グランドに運ぶことなどを通じて、職患での達成感を満喫することができ、万国旗も掲揚しました。春はヨモギを摘んで、草餅入りの花見弁当、夏は矢筈山キャンプ、冬はクリスマスと毎月の行事開催と対応する手づくり御膳などを用意しました。また、高齢化時代に向けては、認知症治療専門病棟、特別養護老人ホーム『松和園』、老人保健施設『フレンドリー松ヶ江』、福祉ホーム『カーサ松ヶ江』、グループホーム『まつぼっくり』の施設も整えました。

キャンプ

モットーの「共に歩むこころで」は、冒頭の治療の理念として開院20周年に制定しました。

またアルコール依存症治療に断酒会支部の設立が不可欠と、自主運営の活動で完全なる回復を目指す療法を継続して48周年も達成することができました。さらにアルコール健康障害対策基本法や県推進の飲酒運転撲滅条令の指定医療機関に指定されました。

喫茶室

最後に、わたしが体験・実践した開院の胎動、誕生、成長、反省、進歩、それにつながる連鎖が、2代、3代と継承され地域との交流のなかで益々の発展がなされますように祈念して擱筆といたします。

松和園

グローバル世界と人工知能AI

臨床心理 加瀬紀幸

韓国のイ・セドル九段まさかの三連敗。囲碁の世界に衝撃が走った。世界トップレベルのプロ棋士の意地をみせ、第四局は制したが一勝四敗。完敗だった。にもかかわらず対局が終わった後のイ・セドルの顔には笑顔があった。そのさわやかな笑顔はとても印象的だった。新しい囲碁の世界の広がりと可能性に触れたことへの喜びとでもいうものがあったのだろうか。

その対戦相手とは、インターネット関連企業の雄Googleが開発した人工知能「アルファ碁」。人工知能（AI）がチェスの世界チャンピオンに初めて1勝してから二十年はたっていない。まだまだ先の話だと思われていた囲碁の王者を生み出したのは、深層学習（ディープラーニング）という人間の脳の神経ネットワーク活動を模したコンピュータープログラム。命令された処理をひたすら繰り返していくというやり方から、精密機器の集合体が自ら学習する技術を手に入れた結果である。

長い間の夢でもあったニューロコンピューターの出現は、長い進化の過程で人類が手にした高次脳機能を必要とする行為や活動をロボットによって代替可能となる時代の扉を開けた。

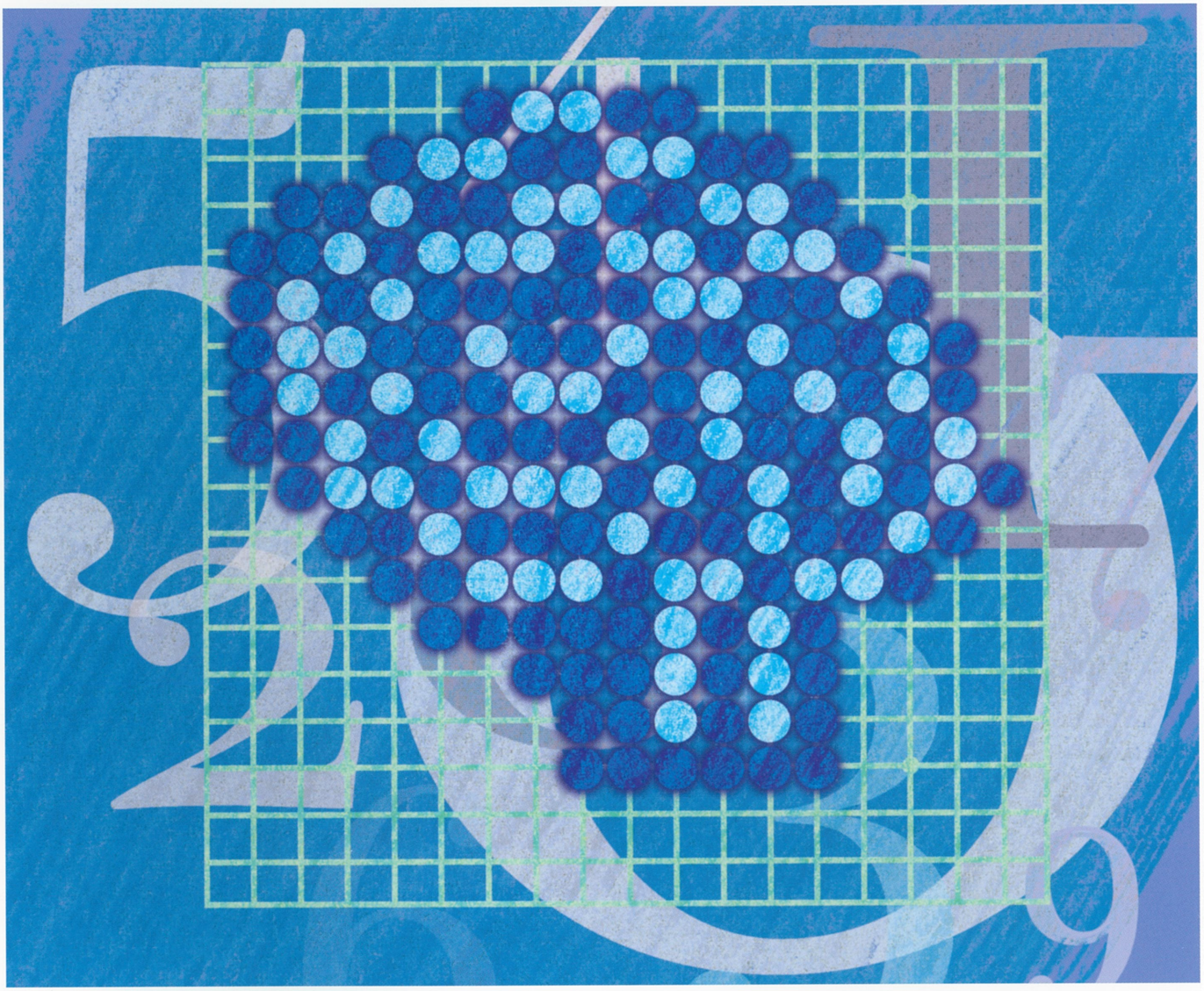
最近ではAIが話題にならない日はないといっても良いほどである。つい先ほどまで観ていたテレビの経済番組では、金融取引においてAI利用が巨額な利益を上げていると解説していた。

現在ある職業の49％が将来ロボットに奪われるだろうという試算が話題になったのも昨年暮れのことだ。仕事はロボットに任せ、人は自由に好きなことに時間を使えばいい、そんな風に楽観的に考えている人もいるかもしれない。逆にロボットに管理された社会が目の前にきていると危機感を抱いている人もいるだろう。

これからは知識を頭に詰め込むような教育は必要ない。必要なのは知識を集め、活用する方法を学ぶことだと、IT（インターネット技術）を教育現場に普及させようと活動している人が語っていた。その主張では、情報端末を用いて必要な情報をいかにすばやく検索するかが人生を左右するという。たしかに、やみくもに本を漁ったり他人に訊いて回るよりも、適切なキーワードを選び検索をかければ、欲しい情報は手に入る。たとえぴったりとしたものがみつからなくとも、ヒントや思わぬ展開がみつかるかもしれない。

しかし、きちんと編纂された辞書や評価の高い書籍と比較すれば、ITの世界は相当いい加減である。かつて家の本棚にずらっと並べられていた百科事典にかわって、ネット上の辞書「ウィキペディア」（責任の所在があるわけではない）が幅を利かせる時代となったが、領域や事柄によっては間違いが多く使い物にならないという経験をしている人も多くみられる。とはいえ確かな検索ができることを早くから学ばせなければならないという考えなのだろうが、そのためには高い判断能力が要求されるはずだ。プログラム言語を小学校から教えた方が良いという意見も出ているという。

一方、グローバル世界で生き延びていくために小学校から英語教育を積極的に進めていく方針はすでに決まった。高度な知的能力を発揮するためには、言語能力が欠かせない。そのためには母語がきちんと身についていなければならない。母語である日



本語を使いこなせるまでにどれくらいの時間が必要か。専門家でなくともわかるだろうにと思うのはわたしだけはないだろう。母語未習熟の段階で別の言語を教えるのは難しい。混乱が起きていずれも不十分になりかねない。高い思考能力や判断能力を身につけるためには幾つかの準備段階を踏まえた発達過程が必要である。

数学も考え方によっては言語の一つといえると思う。数学がはじまるのは中学からである。もっともわが国では、言語としての数学という認識が不十分だから、算数から数学へとうまく移行できないでいる。

感覚・知覚・認知・思考そして学習。こういった人間の情報処理過程の仕組みを心理学は長い時をかけて研究してきた。その成果としてAIは生まれたともいえる。しかし、AI人工知能の誕生には「発達」という視点が欠けている。数多の最先端技術を組み合わせ、もっぱら効率的な学習をさせるためにはどうしたらよいかが課題となっている。学習を重ねていくとどうなるか、プログラムをチェックしてもわからない、ブラックボックスだという。グローバル世界と学習能力だけにたけた人工知能がどんな発達と調和を遂げていくのか、誰にもわからない。

「2015年病院看護実態調査」が発表されました

公益社団法人日本看護協会による「2015年病院看護実態調査」の結果が、平成28年4月15日に発表されました。この調査は、昨年度まで「病院における看護職員需給状況調査」として行われてきたもので、調査内容の拡充などにより今回から名称が変更されています。

調査によると、常勤看護職員の離職率には過去5年間に渡り大きな増減はなく、年11.0%前後で推移しています。直近の調査対象年度である平成26年度の常勤看護職員の離職率は10.8%、新卒看護職員の離職率は7.5%で、都道府県別にみた常勤看護職員の離職率は、首都圏など大都市部で高い傾向が継続しています。また、常勤・新卒ともに、中小規模病院での離職率が高い傾向がみられます。

新卒者や中堅職員の給与は過去5年間ほぼ横ばいながら、今回の調査では新卒者の初任給（総額）が前回調査に比べやや減少しています。

看護部長の病院経営への参画については、「病院経営会議の正式メンバーである」病院が73.0%、「病院経営の方針の決定に関与している」病院が63.8%となっています。

医療法人　社団　松和会
SHOWAKAI
門司松ヶ江病院
〒800-0112 北九州市門司区大字畑355
TEL (093) 481-1281 (代表) FAX (093) 481-7069
URL http://www.matsugae.or.jp/
発 行 者 ： 山浦 敏宏

《診療科目》 精神科・心療内科・内科

《関連施設》 介護老人保健施設「フレンドリー松ヶ江」
特別養護老人ホーム「松和園」
精神障害者福祉ホーム「カーサ松ヶ江」
精神障害者グループホーム「まつぼっくり」